

一般社団法人 大学英語教育学会(JACET)



JACET Kansai Chapter • 関西支部

2024 年度支部大会

March 1st (Sat) 2025, 13:30～18:30

@近畿大学 東大阪キャンパス 3号館

(Building 3 of Kindai University, Higashiosaka Campus)

大会テーマ(Conference Theme) :

多様化する社会に応える英語教育：AI 時代の教育力とは?
The Role and Identity of English Teachers in the Digital Age:
Rethinking English Education and Its Role Adapted to
Technological Innovation

お問い合わせ

一般社団法人 大学英語教育学会 関西支部 (JACET Kansai Chapter)
<https://jacet-kansai.org/inquiry/>

会場地図 / MAP

— 各主要駅からの経路・所要時間(目安) —

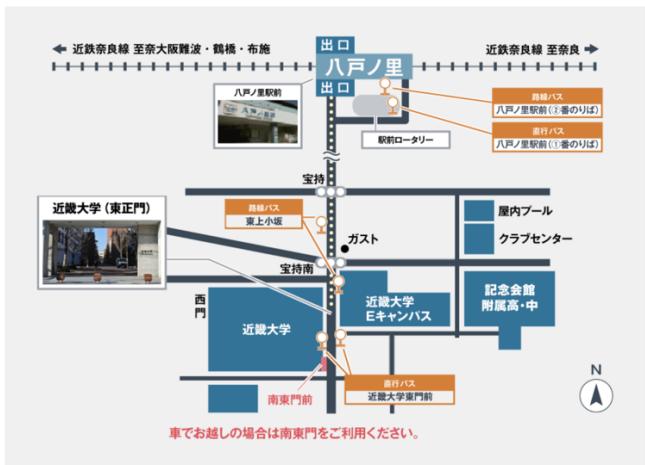


※各最短ルートを選択した場合。

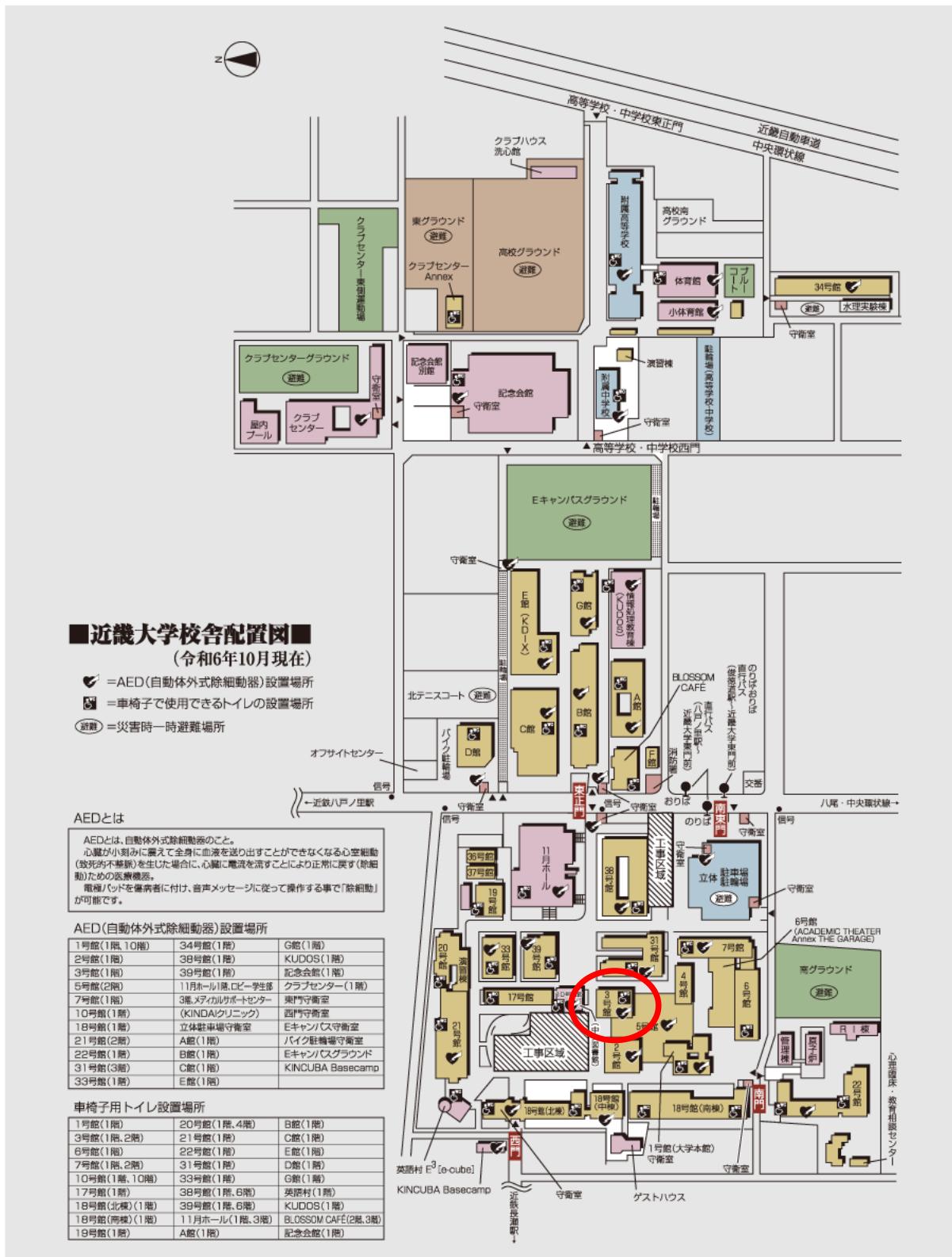
— 近鉄大阪線・長瀬駅からの経路 (徒歩約10分) —



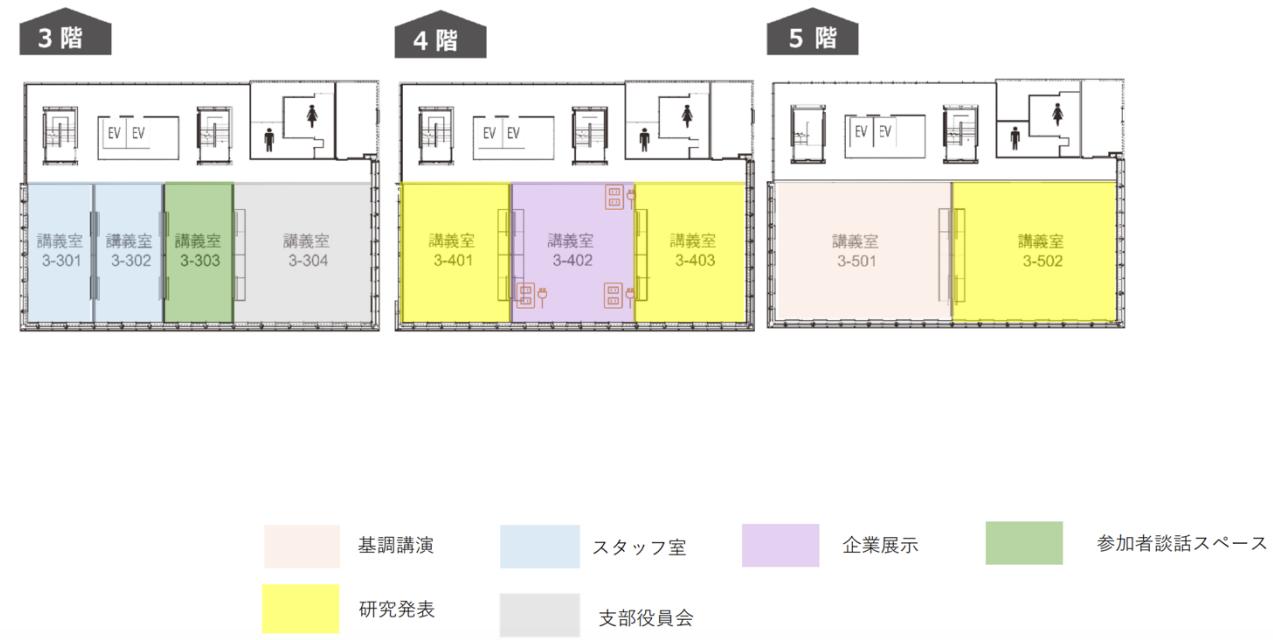
— 近鉄奈良線・八戸ノ里駅からの経路 (徒歩約20分、バス約6分) —



キャンパスマップ (令和6年10月~)



校舎・講義室等の配置図（3号館）



＜お知らせ＞

- ◆ JACET 関西支部大会は、全て 3号館で実施します。
- ◆ 総合受付は、3-501 教室前(5階)で実施します。
- ◆ 賛助展示は、3-402 教室(4階)で実施します。
- ◆ 開会式・閉会式・基調講演①・貴重講演②・賛助会員フラッシュトークは、3-501 教室(5階)で実施します。
- ◆ 研究発表は、3-502 教室(5階)、3-401 教室(4階)、3-403 教室(4階段)の3会場で実施します。
- ◆ 参加者の談話スペースは、3-303(3階)です。

JACET 関西支部 2024 年度支部大会
全体プログラム/ Program
2025 年 3 月 1 日 (土) / March 1st 2025, Saturday

時間 Time	内容 Events		場所 Room			
13:30- 13:45	開会式 Opening Ceremony		3-501			
13:45- 13:50	休憩 Break					
13:50- 15:20	基調講演 1 / Keynote Speech : トム・ガリー 先生 / Professor Tom Gally (東京大学特任教授 / Specially Appointed Professor, The University of Tokyo) 講演テーマ・内容 : AI の衝撃と大学英語教育の未来 概要 : ChatGPT の登場から 2 年以上が経過し、日本の外国語教育は大きな変革の波に直面しています。教師たちは授業レベルで各種 AI の活用に適応し始めていますが、大学や国レベルにおける英語カリキュラムや政策の在り方については、まだ多くの課題が残されています。本講演では、言語学習と教育に影響を与えていたる最新の AI 技術について議論を深め、特に大学の英語教師がこの変化の時代にどのように対応すべきかを考察します。		3-501			
15:20- 15:45	賛助会員フラッシュトーク Supporting Members Presentation		3-501			
15:45- 16:10	研究発表 1 / Presentations 1 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">【3-502】 大谷 由布子 (大分大学) 瀬口 珠美 (大分大学) 教員に期待される英語力獲得を目指して : 技能統合型授業の展開</td> <td style="width: 33%;">【3-401】 関山 博久 (関西学院大学大学院) シャドーイングが構音の正確性に与える効果:無声シャドーイングと比較して</td> <td style="width: 33%;">【3-403】 仲川 浩世 (大阪女学院大学・大阪女学院短期大学) 田口 達也 (愛知教育大学) 松村 優子 (近畿大学) 大学教育に対する態度と英語プレゼンテーションに対する意識に関する研究</td> </tr> </table>		【3-502】 大谷 由布子 (大分大学) 瀬口 珠美 (大分大学) 教員に期待される英語力獲得を目指して : 技能統合型授業の展開	【3-401】 関山 博久 (関西学院大学大学院) シャドーイングが構音の正確性に与える効果:無声シャドーイングと比較して	【3-403】 仲川 浩世 (大阪女学院大学・大阪女学院短期大学) 田口 達也 (愛知教育大学) 松村 優子 (近畿大学) 大学教育に対する態度と英語プレゼンテーションに対する意識に関する研究	3-502 3-401 3-403
【3-502】 大谷 由布子 (大分大学) 瀬口 珠美 (大分大学) 教員に期待される英語力獲得を目指して : 技能統合型授業の展開	【3-401】 関山 博久 (関西学院大学大学院) シャドーイングが構音の正確性に与える効果:無声シャドーイングと比較して	【3-403】 仲川 浩世 (大阪女学院大学・大阪女学院短期大学) 田口 達也 (愛知教育大学) 松村 優子 (近畿大学) 大学教育に対する態度と英語プレゼンテーションに対する意識に関する研究				
16:10- 16:15	休憩 Break					
16:15- 16:40	研究発表 2 / Presentations 2 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">【3-502】 三原 京 (近畿大学) オンライン授業と Web 学習システムの効果的な活用</td> <td style="width: 33%;">【3-401】 田中 順子 (神戸大学) 章 恩琦 (追手門学院大学・神戸大学) 村尾 元 (神戸大学) L2 学習における明示的フィードバックのモダリティーと気づきとの関係</td> <td style="width: 33%;">【3-403】 荒木 瑞夫 (近畿大学) 教室内リーディング活動での AI によるアドバイジングの試み</td> </tr> </table>		【3-502】 三原 京 (近畿大学) オンライン授業と Web 学習システムの効果的な活用	【3-401】 田中 順子 (神戸大学) 章 恩琦 (追手門学院大学・神戸大学) 村尾 元 (神戸大学) L2 学習における明示的フィードバックのモダリティーと気づきとの関係	【3-403】 荒木 瑞夫 (近畿大学) 教室内リーディング活動での AI によるアドバイジングの試み	3-502 3-401 3-403
【3-502】 三原 京 (近畿大学) オンライン授業と Web 学習システムの効果的な活用	【3-401】 田中 順子 (神戸大学) 章 恩琦 (追手門学院大学・神戸大学) 村尾 元 (神戸大学) L2 学習における明示的フィードバックのモダリティーと気づきとの関係	【3-403】 荒木 瑞夫 (近畿大学) 教室内リーディング活動での AI によるアドバイジングの試み				
16:40- 16:45	休憩 Break					
16:45- 18:15	基調講演 2 / Keynote Speech : 野口ジュディー 先生 / Professor Emerita Judy Noguchi (神戸学院大学名誉教授 / Professor Emerita, Kobe Gakuin University) 講演テーマ・内容 : ESP (English for specific purposes) for everyone: a brief review, basic concepts, and classroom applications Abstract: English for specific purposes began in order to help nonnative speakers learn about professional communication, especially in the sciences and for business purposes. Today, ESP is		3-501			

	considered to be useful even for native English speakers, as there are no “native speakers of ESP.” The patterns and structures used in professional communication need to be learned, with language ability essentially being a matter of pattern recognition. In fact, recent developments in AI (artificial intelligence) and machine translation use algorithms based on LLMs (large language models) to identify patterns of language usage. This talk will present a brief review of ESP, describe its core concepts of discourse community and genre analysis, and then suggest how these ideas can be applied in the classroom.	
18:15- 18:30	閉会式 Closing Ceremony	3-501

研究発表詳細 / Research Presentations

Ref. No.	001
時間 / Time	15:45-16:10
会場 / Venue	3-502
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者 (所属) / Name(s)	大谷 由布子 (大分大学)、瀬口 珠美 (大分大学) OTANI, Yuko (Oita U), SEGUCHI, Tamami (Oita U)
発表タイトル / Title	教員に期待される英語力獲得を目指して：技能統合型授業の展開 Toward the Acquisition of English Proficiency Required of Teachers: Would Integration of Skills Do the Job?
発表概要 / Abstract	<p>文部科学省が教員に求める B2 レベルの英語能力は中学・高校の英語科教員はもとより、小学校教員にとっても重要な指標である。小学校では、児童の認知的発達や理解度に応じて柔軟に英語を使いこなし、質の高い英語インプットを提供する能力が求められるからだ。教員採用試験合格率および採用率が全国の国立大学で上位に位置する大分大学では、将来の教員にこの英語レベルを達成させることが、重要な責務であると考える。</p> <p>本学 1 年次履修科目の「Oral English」と「総合英語」では、前者で聞く話す、後者で読む書くの技能を養成しているが、過去 3 年間の TOEFL Jr の成績データによると、1 年終了時には B2 に遠く及ばないどころか B1 レベルに到達する学生数すら限られているのが現状だ。原因のひとつとして、英語力の可視化が不十分であること、また週 2 回の授業間の連携が十分に取れていないことを挙げる。</p> <p>こうした課題に対処するため、本年度より上記科目の接続を図り、授業計画の根本的な見直しを開始した。具体的には、授業連携、教材開発、英語力測定の 3 つの柱で教育改善を図り、次年度には開発した教材を用いて学生の総合的な英語力の向上を目指す。大学の外国語教育では、非常勤講師への依存度が高く、学生情報共有や教材・指導方法の統一が十分に行われていないという課題もあるので、本取組が成果を上げれば、シラバスや教材を公開し、外国語教育改善の一例として共有することを目指している。</p>

Ref. No.	002
時間 / Time	15:45-16:10
会場 / Venue	3-401
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者 (所属) / Name(s)	関山 博久 (関西学院大学大学院) SEKIYAMA, Hirohisa (Graduate School, Kwansei Gakuin U)
発表タイトル / Title	シャドーイングが構音の正確性に与える効果：無声シャドーイングと比較して The Effect of Shadowing on Articulation Accuracy: In Comparison with Covert Shadowing
発表概要 / Abstract	聞こえた音声を即座に口頭で再生する行為であるシャドーイングは、英語リスニング能力の向上に効果がある。その理由の一つに、シャドーイングは構音の正確性、つまり音読の正確性を向上させることができることが挙げられる。シャドーイングで音読の正確性が向上すること、そして音読の正確性とリスニング能力は関連することが実証されているためである。しかし、音読の正確性が向上する詳細な因果関係が不明である。例えば、シャドーイング時の有声の復唱、または復唱自体のどちらに起因するのか分からぬ。この問題を解決することを目的に、「シャドーイングにおける、有声の復唱ではなく復唱自体が構音の正確性を向上させるか」という研究課題を定め、CEFR の B1 に該当する大学生および大学院生を対象に単発の実験を行った。有声の復唱を測定するための有声シャドーイング条件では、6 回のシャドーイング前後に音読テストを行い、構音の正確性を測定した。復唱自体を測定するための無声シャドーイング条件では、声に出さずに心の中でシャドーイングした。結果として、事前および事後の音読テストにおいて、両条件間に有意差は見られなかったが、事前から事後の音読テストにかけて、いずれの条件でも音読の正確性が有意に向上した。この結果を鑑み、構音の正確性が向上するのは、シャドーイングにおける有声の復唱ではなく復唱自体に起因することが示唆された。

Ref. No.	003
時間 / Time	15:45-16:10
会場 / Venue	3-403
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者 (所属) / Name(s)	仲川 浩世 (大阪女学院大学・大阪女学院短期大学)、田口 達也 (愛知教育大学)、松村 優子 (近畿大学) NAKAGAWA, Hiroyo (Osaka Jogakuin U / Osaka Jogakuin College), TAGUCHI, Tatsuya (Aichi U of Education), MATSUMURA, Yuko (Kindai U)
発表タイトル / Title	大学教育に対する態度と英語プレゼンテーションに対する意識に関する研究 Insights into Student Attitudes toward University Education and English Presentations
発表概要 / Abstract	テクノロジーの発展により生成 AI が普及し、現代の大学教育ではそれらの活用が当然のこととなっている (木村, 2024)。しかし、単に活用するだけではなく、作成した内容を聴衆がより納得できるように、またグローバル化に対応して、英語で口頭発表する能力も不可欠である。このように、英語プレゼンテーション力を養う教育は、重要視されつつある。この背後には、学習者の大学教育に対する態度が大きく関わっており、大学教育に肯定的な態度を抱いているとプレゼンテーションへのスキル習得が期待される。しかし、その関係性を明らかにした研究は少ない。そのため、本研究の目的は、日本人大学生の大学教育に対する態度と英語プレゼンテーションに対する態度及び自信との関連を探ることである。本研究の協力者は、国立大学の 1・2 年生一般英語履修者計 110 名 (男性 : 31 名、女性 : 79 名) である。大学教育への態度 (Vallerand et al., 1992) と英語プレゼンテーションに対する意識 (幸重他, 2007) の先行研究に基づいて質問紙を作成し、2024 年度春・秋学期に調査を実施した。まず、後者に対する因子分析を行ったところ、プレゼンテーションに対する必要性、実演段階の自信、準備段階の自信という 3 因子が抽出された。さらに、各因子との大学教育に対する態度との関係を分析した。その結果と併せて、英語授業における教育的示唆を考察したい。

Ref. No.	004
時間 / Time	16:15-16:40
会場 / Venue	3-502
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者 (所属) / Name(s)	三原 京 (近畿大学) MIHARA, Kei (Kindai U)
発表タイトル / Title	オンライン授業と Web 学習システムの効果的な活用 Effectiveness of Online Lessons and Self-paced Online Learning
発表概要 / Abstract	近畿大学情報学部では、Society 5.0 に向けた人材育成のため、外国語科目的授業形態をメディア授業と定めている。すでに新型コロナは「5 類感染症」に格下げになり、他学部の外国語科目は対面授業に戻っているが、情報学部では Zoom を使ったリアルタイムのオンライン授業を実施し、Web 学習システムを授業の内外で活用している。ただ、日本人英語教員が担当する 1 年次の授業では、TOEIC L&R のスコアアップが目標であるのに、紙ベースの TOEIC L&R の対策にオンライン授業や Web 学習システムで十分な対応ができるかという疑問が生じるのは事実である。また、学生が自分のペースでオンラインの課題に取り組まないといけないため、放置してしまうリスクもある。しかし文部科学省の『Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～』に、Society 5.0 では「いつでもどこでも学ぶことができるようになると予測される」(p. 8) と明記されていることから、授業だけでなく、個々の学生の能力や関心に応じた学びの機会を提供し、いつでもどこでも学習できるように環境を整えることが求められる。本実践報告では、情報学部が実施しているオンライン授業と Web 学習システムが、紙ベースの TOEIC L&R 対策として十分な成果を上げ、学生の満足度も高いということについて、報告する。

Ref. No.	005
時間 / Time	16:15-16:40
会場 / Venue	3-401
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者 (所属) / Name(s)	田中 順子 (神戸大学)、韋 恩琦 (追手門学院大学・神戸大学)、村尾 元 (神戸大学) TANAKA, Junko (Kobe University), WEI, Enqi (Otemon Gakuin U / Kobe University), MURAO, Hajime (Kobe U)
発表タイトル / Title	L2学習における明示的フィードバックのモダリティーと気づきとの関係 Modality of explicit feedback in L2 learning and its relationship to noticing
発表概要 / Abstract	本研究の目的はL2学習において、フィードバック(FB)付与時のモダリティーの違いによって学習者の気づきが異なるのかを検討することである。先行研究ではFB付与のモダリティーよりもFBの明示性が重要であり、複数のモダリティーを通じた学習が学習効果を高め、学習には気づきを伴うと言われている。このことから、動画(音声と視覚モダリティー)でのFB付与が、音声(單一モダリティー)でのFB付与よりも目標言語(TL)項目についての気づきをもたらしやすいとの仮説を立てた。研究方法であるが、対象者はL1中国語でL2日本語能力N2程度の成人で、音声FB群2名、動画FB群2名の合計4名である。TL項目は場所を表す日本語助詞「に」「を」「で」で、手続きはインタビューを除いて全てコンピュータ上で行なわれた。1日目に語彙テスト、事前テスト、FB付与、直後事後テストを行い、約1ヶ月後に遅延事後テスト、事後アンケート、アンケート結果に基づいた半構造化インタビューを行なった。気づきは質的並びに量的に評価した。結果はTL項目の正確さ、気づきの質・量とともに、音声群、動画群ともにほぼ同様で、FB経験がより強く記憶に残ったのは動画群であった。予想に反して両群間に気づきの質・量ともに大きな差異が認められなかつたが、この理由の一つは対象者の人数が限定的であったことに拠ると考察する。今後対象者を増やして検討を続ける予定である。

Ref. No.	006
時間 / Time	16:15-16:40
会場 / Venue	3-403
発表言語 / Language	日本語 (Japanese)
発表者 (所属) / Name(s)	荒木 瑞夫 (近畿大学) ARAKI, Tamao (Kindai U)
発表タイトル / Title	教室内リーディング活動での AI によるアドバイジングの試み AI Advising in Classroom Reading Activities
発表概要 / Abstract	AI の利用やその検討が加速度的に進む英語教育において、ライティング活動での AI を用いた実践例の報告に比べ、教室内のリーディング活動での AI 活用についての報告は少ない。本発表では、Chatbot AI (ChatGPT) と Google Docs を組み合わせた教室内リーディング教材の作成と、それを用いた教育実践について報告する。本実践は 2024 年度後期に、大学 1 年生 17 名が受講する週 2 回の英語クラスを対象に行った。対象クラスでは期末試験として TOEIC® IP を受検することから、授業でも TOEIC® の問題形式の理解とそこで問われている語彙・文法項目を確認する機会を設けた。そこで使用する教材として、Google Docs 上にリーディングセクションをモデルとした問題を作成し、そこに ChatGPT を API で呼び込むことで、学習者が選ぶ語句や文について語彙・文法的な説明とヒントを即時的に付与するシステムを作成した。これを「AI アドバイザー」と名付け、その使用方法を学習者に説明し、学習者は任意でそれを使用した。許可を得た上で、学習者による教材使用の記録を取得し、事後に教材への評価と AI 使用についての質問紙への記入を依頼した。「AI アドバイザーの機能は英語学習の参考になる」(5 点中平均 4.25 点) などの回答があった一方で、正答にかなり近いアドバイスをしてしまうなどの教材の課題も確認された。発表では、質問紙への回答と教材使用の記録をもとに、教室内リーディング活動における AI によるアドバイジングの利用可能性と課題について考察する。

作成・発行

JACET 関西支部 研究企画委員会 (2024 年度)

委員長	山中 司 (立命館大)
副委員長	鳶田 和美 (関西外国語短大)
副委員長	近藤 雪絵 (立命館大)
委員	荒木 瑞夫 (近畿大)
委員	デイヴィス 恵美 (大阪成蹊大)
委員	後藤 秀貴 (立命館大)
委員	平野 亜也子 (京都産業大)
委員	松永 舞 (京都産業大)
委員	宮永 正治 (近畿大)
委員	Musty, Nicholas (神戸学院大)
委員	西条 正樹 (びわこ成蹊スポーツ大)
委員	大賀 まゆみ (立命館大)
委員	Rudolph, Nathanael (近畿大)
委員	坂本 南美 (同志社大)
委員	阪上 潤 (立命館大)
委員	下村 冬彦 (立命館大)
委員	Smithers, Ryan (大谷大)
委員	豊田 順子 (関西外国語大)
委員	豊島 知穂 (京都産業大)
委員	上田 真理沙 (立命館大)